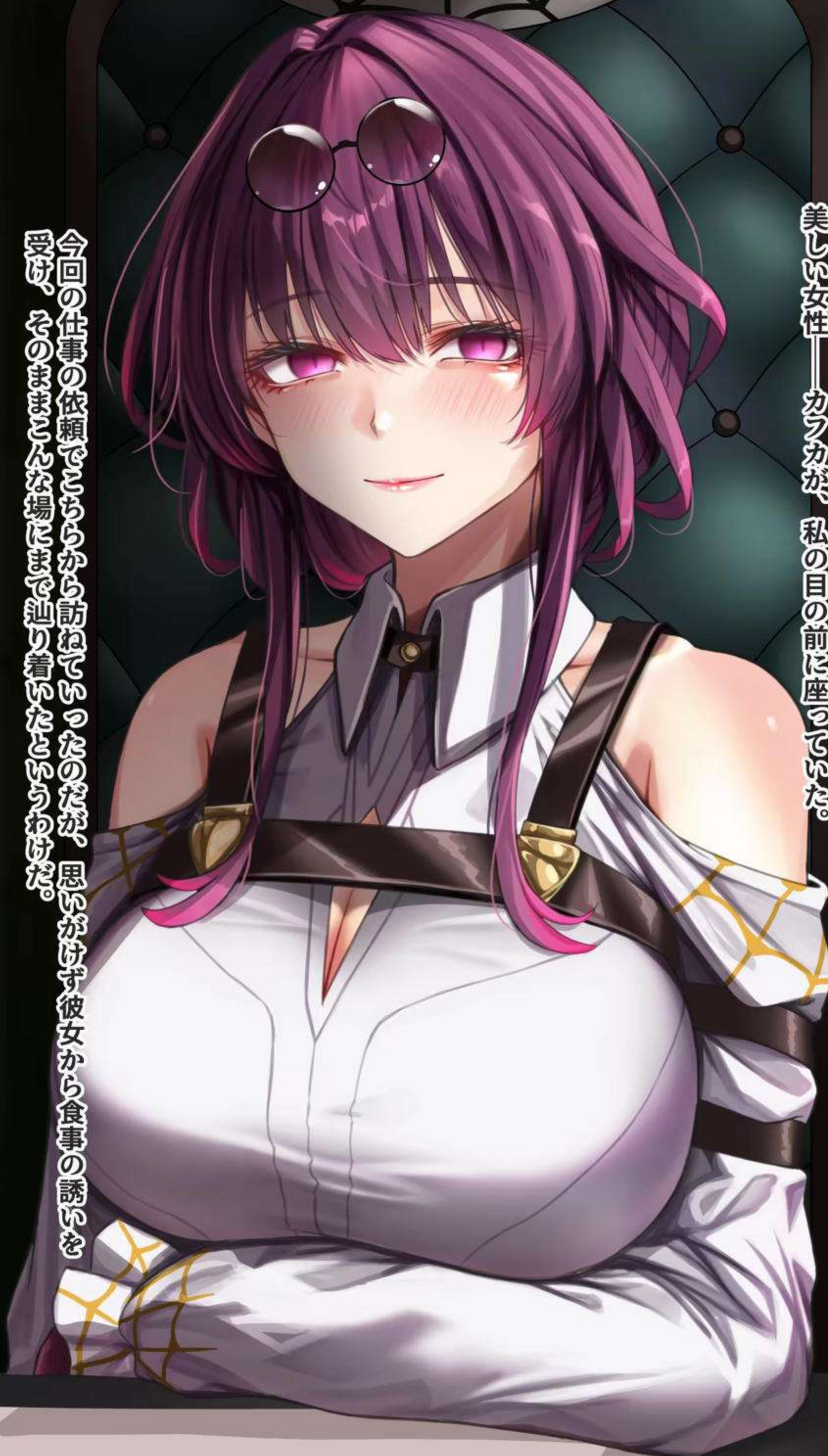


ステラロンハンターのメンバーであり、クールで落ち着いた雰囲気纏う美しい女性——カフカが、私の目の前に座っていた。

今回の仕事の依頼でこちらから訪ねていったのだが、思いがけず彼女から食事の誘いを受け、そのままこんな場にまで辿り着いたというわけだ。

ちょうど今、食事を終えて、ワインが運ばれてくるのを待っているところだった。



正直なところ、あの成熟した肢体を一度はこの手に収めてみたい——
そんな淡い欲望を、私は以前から抱いていた。

だが、相手はあのステラロンハンターの精鋭、カフカ。
命がいくつあっても足りないような相手に、最初から諦める他なかったのだ。

けれど幸運なことに、今まさに彼女の前に運ばれているワインは、
私が密かに用意していた「特製」の「一本」だった。

もちろん、形式的な贈り物は別にあつたが、万が一のために準備していたこの「一本が、
思わぬかたちで活躍することになった——まさに、備えあれば憂いなし、というわけだ。



彼女がこの「特製ワイン」に口をつけるかどうか、それは正直、直前まで半信半疑だった。しかし、さっきの彼女の様子を見れば、そんな不安は吹き飛ぶ。グラスをあっさりと空け、さらに何杯もおかわりを重ねているのだから。

元々アルコール度数の高いワインでもあり、彼女はそれを美味しそうに飲み干していく。その優雅な仕草を見ているうちに、気づけば話の内容が頭に入らない。——もしかしたら、本当に彼女の知られざる「一面」を味わえるかもしれない。そんな甘い幻想が、ふと脳裏をよぎっていた。



あの人の視線は、まるでこちらの奥底まで見透かしてくるようで、
背筋が凍るほどに恐ろしかった。

それでも——いや、だからこそかもしれない——下半身はまるで別の意志を
持つ生き物のように、己の衝動を抑えきれずにいた。

ずっとあの顔を見つめていたら、きっと自分でも抑えきれなくなる。
そう直感した瞬間、私は「トイレに行く」とだけ告げてその場を離れた。

こんな機会は二度と訪れないかもしれない。
だからこそ、冷静さを取り戻さねばならなかった。
一度深呼吸して、頭を冷やしてからでなければ——この一手を、
確信にものにするなどできはしないと思ったのだ。



REC

数分後、席に戻ると、想像を超える光景が目の前に広がっていた。
あのカラカが――食卓に顔を伏せたまま、静かに眠りについていたので。

彼女の口元からこぼれた唾液は、テーブルの上に小さな水たまりを作っており、
その存在が、確かこの場の現実を物語っていた。

あゝ...

あゝ...

とろろ...

美しい者の無防備な姿というのは、何度見ても新鮮だ。
普段なら決して人前に晒すことのない、飾り気のない素の姿。
カラカとて、例外ではなかったということか――。

REC
彼女の顔をそっと持ち上げ、眼球の状態を確認してみる。
まだ眠りはそれほど深くはないようだった。
僅かに瞼に力がこもっており、それに応じて微かな抵抗が感じられたし、
身体もときおり小さく痙攣するように動いていた。

おそらく、意識そのものは既に途絶えているのだろう。
だが、肉体に残された神経の残滓が、未だに反射的な反応を見せている――
そんな印象を受けた。

この稀有な機会を、無駄にするわけにはいかない。
一度きりかもしれないこの状況を最大限に活かすためには、
さらに慎重な準備が必要となるだろう。

んー……
んー……
ビクン!

んー……

んー



REC

あらかじめ用意していたタオルを彼女の口元にそっと添えると、まるでそれを待っていたかのように、半ば開いた瞼の隙間から覗く眼球が、ゆっくりと下方へと沈んでいくのが見えた。

まだ完全な昏睡には至っておらず、わずかに残された意識の残響が、口元への刺激を知覚し、それに応じて眼球運動を誘発したのだろう。

ふー

うう……

もちろん、そこに彼女自身の意志は存在しない。起きていたならば、タオルが顔に近づいた瞬間に違和感を覚え、拒絶の反応を示していたはずだ。しかし今の彼女は、ただ静かにタオルの中身を吸い込むだけ――それが全てだった。

REC

数分後、タオルを取り除くと、顎の力が完全に抜け落ちた彼女の顔が露わになった。酸素の供給が一時的に制限されたことにより、自然と開いた回は閉じることなく、そのまま大きく開いた状態で固まっていた。

その影響か、唾液も大量に流れ出していた。

こが〜

こが〜

再び彼女の臉を持ち上げてみると、今度は抵抗の兆しすらなく、滑らかに持ち上がった。

眼球は大きく上を向いたまま静止しており、深い眠りに落ちた者特有の兆候がはつきりと見て取れた。

ただ、観察を続ける上で彼女のサングラスが視界の妨げとなっていたため、それを一旦、彼女の頭の上にそっと置くことにした。

ん

こが〜

ん

こが〜

REC

REC
開いたままの彼女の瞳を見つめていると、やがて眼球がゆっくりと動き始めた。
もしかすると——夢を見ているのだろうか。

ばあ...

うう〜っ

それが脳内に微かに残った電気信号による、ただの生理的な動きなのか。
それとも、意識の奥深くで本当に夢の世界を彷徨っているのか。
それを確かめる術はない。

REC
先ほどから彼女の呼吸音がどこか苦しげに感じられたため、
少し楽にしてやることにした。

口腔内に指を深く差し入れ、舌を外へと軽く引き出してやる――
そのための動作だった。

いぢゅっ

こお...

いぢゅっ

かほっ

机にうつ伏せになった姿勢のままでは、気道が圧迫されて呼吸が
困難になっていたのかもしれない。

いずれはベッドへと移す予定だったが、それを回裏に、彼女の口腔内の
様子を探ってみたいという好奇心もあった。

思った以上に温かく、そしてぬめり気を帯びた感触――
それはまるで、形を持たない柔らかなスライムに触れているかのようなだった。

REC

舌が長く外へ出されたことで気道が確保されたのか、彼女の呼吸は先ほどよりもいくぶん軽やかになったように感じられた。

とはいえ、眠りが深まっているせいか、小さな寝息——むしろ微かな鼾のような音が、部屋の中に静かに響いていた。

はぁ〜

ぐう〜

彼女の眼球はすでに左右ばらばらに動いており、それを確認した時点で、最終的な安全が確保されたと判断した。そして私は、彼女の身体を抱き上げてベッドへと移動させた。

REC

ベッドに移したことで、
ようやく彼女の均整の取れた肢体がはつきりと姿を現した。
いつもはコートの下に半ば隠れていた下腹部には、
脚全体を包み込むストッキングと、独特な模様の入った
パンツが絶妙な調和をなしていた。

特にあのパンツは、ある意味ではスカートよりも遥かに
官能的な美しさを湛えているように思える。

それはきつと、彼女の下半身の曲線を隠すことなく、
むしろ際立たせていたからだろう。

呼吸に合わせて、彼女のシャツとパンツは静かに上下に揺れていた。



震える手で、まるで贈り物の包装紙を剥がすかのように、彼女のシャツの前を静かに開いてみた。

その奥にあったのは——誰の目にも触れたことのないであろう、カラカの白く滑らかな胸元だった。

こお...

もしこの姿を、たとえ偶然であったとしても彼女自身に見られたなら、きつと問答無用で、私という存在そのものを抹消しにかかるだろう。

いや、それどころか、存在を消し去られる方がまだマシだと思えるようなことを——彼女は私に課してくるに違いない。

そう考えた瞬間、自分が今まさに取り返しをつかないことをしているという現実が、急激に意識の中に染み込んできて、背筋に冷たいものが走った。





REC

ふうっ

い

い

むわぁー

今度は、彼女の下半身を包んでいたパンツを、慎重にゆっくりと降ろしていった。

シルエットそのものは、布越しに見えていたものとほとんど変わらなかったが——
露わになった肌本来の白さが放つ存在感は、まさに圧倒的だった。

とりわけ、その純白のボディの中心に、ほのかに紫がかった色合いで揺れる小さな茂みがあった。

それは、これまで想像の中でしか描けなかった光景を、いま目の前で確かに捉えたという——
言葉にしがたい達成感とともに、深く胸に刻まれるものだった。

彼女の足首をそっと持ち上げ、普段座するときのように脚を組ませしてみた。

意識のない状態であっても、ごく自然に脚が交差する様子には思わず感嘆してしまう。

そして、その状態だからこそ見える角度から観察できた景色には、ある種の新鮮さがあった。

REC

かほっ

かほっ

はあ〜

今後、彼女と再び顔を合わせたとき——もし彼女が何気なく脚を組む姿を見てしまったら。
間違いない、いま脳裏に焼きついたこの光景が、ふとした瞬間に蘇ってしまう気がした。



観察を続けている最中、ふいに彼女の下腹部から液体が勢いよく流れ出す瞬間があった。

先ほどのワインが影響していた可能性もあるが、それ以上に十両脚を持ち上げて交差させ続けていたことで、腹部に余計な圧がかかったことが主な要因だろう。

REC

かはっ

こが...

スニーツー

いずれにせよ——あのステラロン・ハンターのクールビューティが、何事もなかったかのようにベッドの上で身体の限界をさらけ出す姿は、おそらく二度と目にするここのない光景に違いなかった。



REC
万が一、衣服が濡れてしまった後は後々厄介だと思い、ひとまず彼女の下半身からストッキングとパンツを丁寧に脱がせ、横に置いた。

普段は濃い色のタイツに覆われていた素足が、今はありのままの姿で目の前にあった。

その光景を見ると——ここで終わらせるには、あまりにも惜しいという思いが胸をよぎった。

すでに、ここまで来てしまった以上、もう迷いは必要なかった。

たとえ、これからの行為が何かを壊すことになったとしても——
少なくとも、自らが後悔することのない一歩であるべきだと、そう思った。



彼女の秘められた部分は、すでに鈍く光る湿り気を帯びていた。
特製のワインが、思いのほか効いているのかもしれない。

もともと一般的な体質であれば、それほど問題になるような量ではなかったが――
相手が彼女ともなると、果たして加減が適切だったのが少々気がかりだった。

もつとも、今の様子を見る限りでは、
少なくとも外見上は、一般の人間と大きな差は感じられなかった。



REC

彼女の眼の状態も、今のところは安定しているようだった。
自分の置かれた状況を認識しているのかどうか——その瞳はただ、
虚空を彷徨うばかりで、何の焦点も結んでいなかった。

呼吸音があまりに小さく、眠りの深さを確認する
手段は限られていたが——
何よりも、ここまでしてなお自分がまだ生きているという
事実こそが、最大の証拠とも言えるのだった。

ズンズン♡

REC

体勢の都合上、彼女の口を大きく開かせるのは難しかったが、それでも、どうにかして舌だけは引き出すことができた。

もはや目の前にいるのは、いつもの完璧で神秘的なオフィススタイルの美女ではない。奇妙な表情を浮かべたまま、半裸で横たわる一人の肉体にすぎなかった。

巧みな話術と言霊の力で他人を思うままに操っていた彼女が、今はまさに、その身を物理的に操られる側へと変じている――

この感覚は、きつとこの宇宙の誰もが味わったことのないものだろう。少なくとも、彼女を知る者なら誰しもが、そう思わずにはいられないはずだ。

ビクン♡

ビクン♡

REC

やはり、ステラロン・ハンターであろうと、その秘められた部分は意外なほど常識的な構造をしていた。

厳密に言えば「同じ」とは言い切れないものの、少なくとも勝手に想像していたような異形のそれではなかった。

火傷するほどの熱を孕んだ内壁は、外部から侵入した異物を取り込もうとするかのように、しっとりと蠢いていた。

穏やかな表情を浮かべた彼女の顔とは裏腹に——その奥では、まるで別の次元の現象が進行しているようだった。

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

REC

正直なところ——彼女と食事を始めたときには、まさかこんな展開になるとは夢にも思っていなかった。

普段から抱いていた欲望はひとまず脇に置き、いかに彼女に良い印象を与え、取引を成立させるか——そんな極めて業務的なことしか考えていなかったのだ。

「セッ」

「ちゃっ」

けれど、状況はあまりにも都合よく、自然と流れていってしまった。そしてその流れが、結果として自分をここまで運んでしまった、というわけだ。



REC

すべてを何事もなかったかのように整えるのは、少しばかり骨の折れる作業になるだろう。

けれど、この現実離れした出来事を長く胸に刻むためには、そんな苦勞など取るに足らないことだ。

彼女が目を覚ましたとき、ここで起きた一連の「魔法」のような出来事は――すべて、私ひとりだけのものとなるはずだ。

トロキ…♡

そして、これから彼女に対して向き合う自分の中にも、きっと何かが変わっていくだろう。

こんなことを経験してしまった以上、もう以前のような視線では、彼女を見ることなどできないに違いない。



REC

二度と訪れないはずのこの機会が、もし再び巡ってくるのだとしたら——
そのときは、今回以上に常識の外へ踏み出してみたくなるかもしれない。

何しろ今回は、あまりにも突然すぎたのだから。

次こそは、今日やり残したすべてを果たす——そう心に誓った。

それが実現する日が本当に来るかどうかは、いずれめぐる運に委ねるしかない。

♡んご……♡

